清水建設研究報告
第89号平成24年1月

明治・大正期の建築作品集にみる清水組設計組織　その２

松波　秀子
（技術研究所）

The Works and Design Staffs of Shimizu-gumi during Meiji and Taisho Period, II

by **Hideko Matsunami**

Abstract

The contribution of the Shimizu-gumi design staffs for the technology of Japanese modern architecture was examined by the analysis of the works of Shimizu-gumi during Meiji and Taisho period. In volume II, the following three materials were analyzed together with the Shimizu Corporation's history archives and related materials. "Colored plans of architecture" (registered tangible cultural properties) in which 328 major works by Shimizu-gumi design department during 1905 and 1923, "Architecture of Banks designed by Shimizu-gumi design department", and "Architecture of Offices designed by Shimizu-gumi design department". Through this analysis, the development of the design department of the Shimizu-gumi from the late Meiji period to the Taisho period was carefully observed.

概　　要

明治・大正期に編まれた清水組の「作品集」を通して、当時の近代建築技術に対する取り組みについて考察した。その２では、明治 38 年から大正 12 年までの清水組設計部設計の代表的な作品 328 件を収録した『彩色設計図集』（登録有形文化財）と『清水組技術部設計建築作品集 銀行之巻』及び『同 事務所之巻』（大正 4 年）の資料評価を行い、これらを清水建設社史資料及び関連資料に照らして検討し、明治後期から大正までの清水組設計組織の様相と拡充する過程を考察した。

§１．はじめに

平成 23 年 6 月、清水建設所蔵の『彩色設計図集』632 点が「明治後半期から大正期に日本を代表する建設会社が手がけた建築作品を多数収録する彩色設計図集は、わが国近代建築史上に貴重な資料であり、学術的価値が高い。」として、国の登録有形文化財に登録された。明治 38 年から大正 12 年までの間に、清水組が手がけた建築作品の彩色図集で、描かれた作品は多岐にわたり、所在地も全国におよぶ。

本稿は『彩色設計図集』と、同図集から厳選して作製された『清水組技術部設計建築作品集 銀行之巻』及び『清水組技術部設計建築作品集 事務所之巻』を通覧し、これらを作製した清水組設計組織の明治後期から大正までの様相を明らかにしようとするものである。

§２．彩色設計図集

彩色設計図集の当初の装幀は、作品 328 件の彩色図 632 葉を建物種類別に分類し、8 冊のアルバム仕立であったが、現在は原装を解き、各図は独立して保存されている。各冊の収録数と現存する枚数を以下に示す。ただし、室内図 G, H に収録された作品の大半は、A, B, C の巻で平面・立面・断面図が収録されており、室内図のみが収録されたのは 3 件である。従って、現状の収録作品数/総枚数は、A〜F の小計 325 件/567 葉に、G, H の 3 件/65 葉を加え、328 件/632 葉である。建物種別の内訳は、住宅 45 件、銀行 105 件、会社・事務所 56 件、商店 25 件、学校 14 件、図書館 2 件、病院 8 件、公共会館 9 件、娯楽場 4 件、旅館 2 件、料理店 3 件、工場 35 件、倉庫 17 件である。

分冊１　A　住宅ノ巻 1907〜1923　45 件/82 葉
分冊２　B_1 銀行ノ巻 1905〜1914　53 件/78 葉
分冊３　B_2 銀行ノ巻 1941〜1923　52 件/85 葉
B 小計　105 件/163 葉
分冊４　C_1 会社、商店、事務所ノ巻 1905〜1917　52 件/78 葉
分冊５　C_2 会社、商店、事務所ノ巻 1917〜1922　29 件/77 葉
当初は 81 件/155 葉 うち 1 件/1 葉欠落　C 現状小計 80 件/154 葉
分冊６　D　学校、図書館、病院ノ巻 1905〜1923　24 件/43 葉
E　公共会館、娯楽場、旅館、料理店ノ巻 1907〜1921
当初は 19 件/44 葉 うち 1 件/1 葉欠落　E 現状　18 件/43 葉
分冊７　F　工場、倉庫ノ巻 1907〜1922　53 件/82 葉
当初は 327 件/569 葉 うち 2 件/2 葉欠落　A〜F 小計 325 件/567 葉
分冊８　G　室内並家具電燈ノ巻 1909〜1913　23 件/57 葉
H　室内並家具電燈ノ巻 番町清水邸　1 件/8 葉

２．１　彩色設計図集の内容と体裁

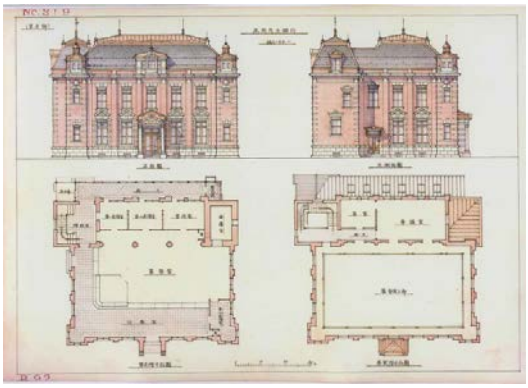
個々の彩色面は、B4 版よりやや小振りで大きさが微妙に異なるサイズ(323～328㎜×230～233㎜)のワットマン紙に描かれているが、後述のように、最初はB4 版(365㎜×240㎜)程度のワットマン紙に描かれ、製本の際に裁断されたものと思われる。単線(稀に二重線)の図面枠(300～303㎜×215～218㎜)を引き、図面上中央あるいは左寄に建物名(目録では工事名)が手書され下線(大半が単線だが稀に二重線)を引く。各図とも一定の基本レイアウトにしたがい、例えば、平面図を下に描き、その平面の上に通り芯を合わせて立面図を配して建物の姿をイメージしやすくするなど、枠内に各図を工夫して配している。住宅作品で比較的小規模な場合は一枚に納められ、大規模な作品については複数枚にわたり、各図には、第一號、第二號と枝番を付す。各平面、立面、断面図の下には、図面名称を記して下線を引くが、一階平面図、階下平面図、二階平面図、階上平面図、正面、正面図、馬車道通正面建圖、側面、側面図など、表記は一定していない。各作品とも各階平面、立面(建図)4 面、断面が描かれ、正面図のみのもの、断面図は省かれているものもある。

建物名称の表記は、基本的には「日比谷邸」、「白木屋大阪支店」など、簡潔に建物名のみを記すが、「森村銀行新築設計圖」など、「新築設計圖」、「設計圖」を建物名の末尾に付す表記もある。また、図面に書かれた建物名と目録の工事名の表記は必ずしも一致しない。例えば、目録の「澁澤氏邸園亭」は図面では「王子渋澤邸ガーデンハウス」(晩香廬)となっている。縮尺は、『室内並家具電燈ノ巻』を除き、全て 1/200 に統一され、建物名の下に縮尺を記し下線を引くが、「縮尺二百分ノ一」、「縮尺貳百分之壱」など、表記が異なる。スケールバーは、基本的には図面下部中央に入れるが、下部右、上部右に入れているものもあり、バーの表現もそれぞれ微妙に異なる。『室内並家具電燈ノ巻』の室内展開図は1/50 とし、原則として右上にキープランを付すが、中央、左、右下に付すものもある。家具、電燈具の図は1/20 とする。

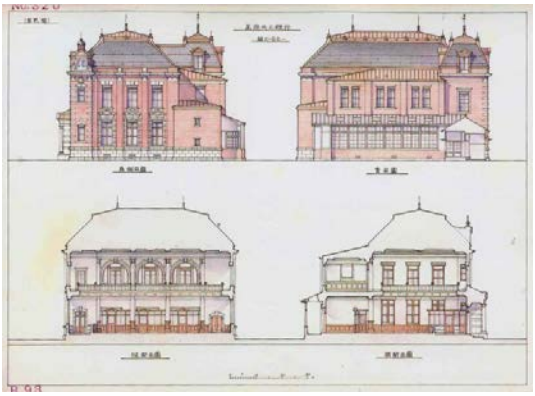
各図は、烏口及び面相筆で墨入れし、水彩絵具により彩色が施されている。彩色図面のほかに当時の青焼きの設計図(マイクロフィルムで保管)などの関連図面や創建時の竣工写真の資料がある作品について、これらを照合すると、わずかに差異が見られるものの、概ね合致している。色彩については、現存する作品が少なく、また当時のカラー写真がないので確認することはできないが、概ね、竣工時の色調と合致していると思われる。例えば渋沢邸ガーデンハウス(晩香廬)の立面図に描かれた赤い屋根瓦は当時の文献の記述「緩い勾配の屋根に赤い瓦を葺いた」と合致している。従って、当初の設計図や白黒写真では確認することのできない色彩情報を伝える資料として彩色図面の持つ資料価値は特筆すべきものである。

現存する高岡共立銀行(現 富山銀行本店)の旧会議室のステンドグラスは、室内展開図に描かれたものと図柄、色調ともほぼ合致し(**図－５，６**)、当初のものであることが確認された。50 分の 1 の図面だが、きわめて緻密に正確に描かれているのに驚かされる。壁紙、クロス、カーテン飾りなども実際の仕様に忠実に描かれたと推測される。他の建物の室内図についても同様であろう。

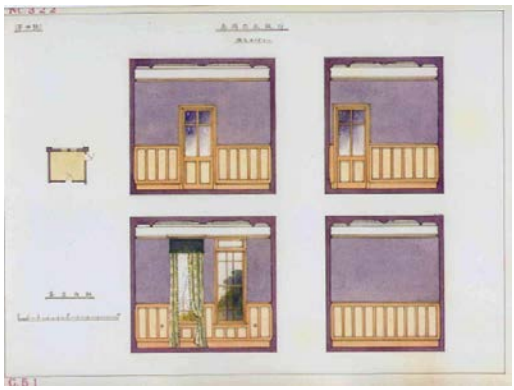
図面の大半は横使いで、各図面の枠外の左上に目録に対応する［總括番號］(例：No.15)、左下に［類別番號］(例：A.1)の番号印が付され、縦使いの場合は、綴じ代と反対側の左側を下とし、下端の左(横位置では左上)に［總括番號］、下端の右(横位置では左下)に［類別番號］の番号印が付されている。枠外の天地の高さは一定せず、図面によっては裁ち落とされて番号印の上半分あるいは下半分が欠落しているのもあり、類別番号、総括番号とも製本する前に番号印が付されたことは明白である。番号印には二種類の字体があり、赤褐色と黒色のものがあり、それぞれに濃淡が見られ、整理に際して一斉に押印したのではないが、個々の図面の［類別番號］と［總括番號］の字体と色調は同一であり、おそらく図面を描き上げた段階で番号を付したものと思われる。いずれにせよ、まず竣工年順に整理がなされ分類整理して各図に［番号］が付されたものと思われる。



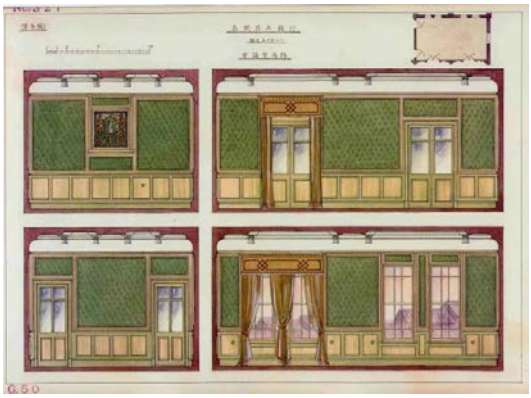
図－１　高岡共立銀行　正面図　側面図　平面図



図－２　高岡共立銀行　側面図　側面図　断面図



図－３　高岡共立銀行 客室内部　展開図



図－４　高岡共立銀行 会議室内部　展開図

図－５　同上展開図 部分

図－６　現存ステンドグラス

その後、大正 12 年の震災以降、合資会社から株式会社清水組に改組する昭和 12 年以前の時期に、各図を建物種別に分類し、大きさを揃えて裁断し、建物用途別 7 冊と「室内並家具電燈ノ巻」1 冊の都合 8 冊のアルバム仕立に装幀されていたことが、以下の綴孔の痕跡、原装を解かれた表紙、背表紙からわかる。

当初の装幀は各図及び目録の右側に幅45㎜のワットマン紙を寒冷紗で付加して綴じ代とし、右端に小穴５穴を穿ち細紐(あるいは紙縒)綴じ、表紙、裏表紙を付し、両表紙は厚紙クロス装、表紙小口隅と背は革装、背文字は金字の箔押で、各冊の表題を記す。その後、当初の小穴の内側に 4 穴を穿ち革紐綴じに改めた時期があったが、現在は装幀を解かれ、1 図ごとに独立して保存され、解かれた両表紙と背表紙も保存されている。各図は原装時の分類と配列に従って保存されており、各冊の巻頭には図面と同様のワットマン紙に印字された「目録」が付され、各冊の表題、各図の［類別番號］（各冊における竣工年順の番号)、［總括番號］(全冊全作品の竣工年順の通し番号)が付され、建物名称として［工事名］、図面名称として［摘要］が記され、各冊とも「類別番號」順に並べている。各冊の背文字の表題及び冒頭に綴じられた「目録」の表記は以下の通りである。ただし、背表紙下端に記された「合資會社 清水組設計部」は省略する。

分冊 1(A) 目録：3 葉、彩色図：82 葉/45 件
背：設計圖集　住宅　1907-1923
設計圖集 住宅ノ巻 目録（自一九〇七年至一九二三年)
類別番號 A 一～八二　總括番號 一五～六三四
分冊 2(B_1) 目録：3 葉、彩色図：78 葉/53 件
背：設計圖集　銀行　1905～1914
B_ 設計圖集 銀行ノ巻 目録（自一九〇五年至一九一四年)
類別番號 B 一～七八　總括番號 一一～三〇一
分冊 3(B_2) 目録：3 葉、彩色図：85 葉/52 件
背：設計圖集　銀行　1914-1923
設計圖集 銀行ノ巻 目録（自一九一四年至一九二三年)
類別番號 B 七九～一六三　總括番號 三〇三～六二五
分冊 4(C_1) 目録3葉. 彩色図:78 葉/52 件 1 葉/1 件欠落 77 葉/51 件
背：設計圖集 會社 商店 事務所 1905-1917
設計圖集 會社 商店 事務所ノ巻 自一九〇五年至一九一七年
類別番號 C 一～七八　總括番號 一～四四五
分冊 5(C_2) 目録：3 葉、彩色図：77 葉/29 件
背：設計圖集 會社 商店 事務所 1917-1922
設計圖集 會社 商店 事務所ノ巻 自一九一七年至一九二二年
類別番號 C 七九～一五五　總括番號 四五七～六一三
分冊 6(D) 目録：2 葉、彩色：43 葉/24 件
(E) 目録:2 葉, 彩色:44 葉/19 件 1 葉/1 件欠落 43 葉/18 件
背：設計圖集　學校、圖書館、病院　1905-1923
公共會館 娯樂場 旅館 料理店 1907-1921
設計圖集 學校 圖書館 病院ノ巻 自一九〇五年至一九二三年
類別番號 D 一～四三　總括番號 四～六三一
設計圖集 公共會館 娯樂場 旅館 料理店ノ巻 自一九〇七年至一九二一年
類別番號 E 一～四四　總括番號 二九～五四五
分冊 7(F) 目録：4 葉、彩色図：82 葉/53 件
背：設計圖集 工場 倉庫 1907-1922
設計圖集 工場、倉庫ノ巻（自一九〇七年至一九二二年)」
類別番號 F 一～八二　總括番號 二～六一八
分冊 8(G) 目録：3 葉、彩色図：57 葉/23 件
(H) 目録：1 葉、彩色図：8 葉/1 件(番町清水氏邸)
背：設計圖集室内並家具電燈 1909-1913
設計圖集 室内並家具電燈ノ巻 自一九〇九年至一九一三年
類別番號 G 一～五七　總括番號 六四～三四九
類別番號 H 一～八　總括番號 二二四～二三一

２．２　彩色設計図集の作製時期と目的

彩色図面集に収録された作品の竣工年は、明治 38 年から大正 12 年まで、すなわち明治後期から関東大震災の直

前の 18 年の間に竣工したもので、五代技師長となる田辺淳吉の在職期間(明治 36〜大正 9)とほぼ重なる。

個別の彩色図を当初の設計図面や竣工写真と照合すると概ね合致しているが、建具や細部意匠が若干異なり、施工中の設計変更が彩色図に反映されず、必ずしも竣工時の姿に忠実ではないものもある。したがって、竣工後ではなく、着工前の設計がほぼ完了したタイミングで描かれたとも考えられるが、それぞれの設計が完了した都度、描かれたとは断定できない。すべての作品について、当初の設計図面や竣工写真があるわけではないので判断し難い。なお、彩色図の完成度、全体の統一性から見て、設計の推敲の過程で描かれたものではない。『田辺淳吉氏作品集』(大正 10 年)に晩香廬の習作として原色図版 2 点が掲載され、編者佐藤功一の解説によれば外観姿図は第一案、内部透視図は色彩の研究のために描かれたとあるが、縮尺も描き方も彩色図とは全く異なっている

彩色図の描き手は、当時の製図場(後に技術部、設計部)の技師、技手、製図工たちである。当然のことながら各図には、線や水彩の筆致、各図の名称、室名などの文字に微妙な個人差が見られるが、描き方の基本は一定しており、全体としてよく統一された印象を与える。わずか 20 年足らずの期間であり、描き手が頻繁に代わることはなく、意匠の傾向も著しく変化していないからであろうが、用紙もほぼ同質で、描く都度入手するのではなく一括して調達されたように見える。一定の期間に集中的に描かれた可能性は否定できない。特に、大正 4 年以前のものについては、以下のように、田辺が技師長となった大正 2 年から 4 年までの間に集中的に描かれたとも考えられる。

大正 4 年 12 月、次節で述べる『清水組技術部設計 建築作品集 銀行之巻』及び『清水組技術部設計 建築作品集 事務所之巻』が刊行された。この作品集に掲載された図版は、彩色図と全く同一のものであり、彩色図が版下に用いられたことは明らかである。したがって、大正 4 年前半までの彩色図は『建築作品集』を編むために描かれた可能性が高く、少なくとも彩色図を調製する目的の一つであったといってよい。彩色図作成当初は、製図場(技術部)が誇る主要作品として、銀行建築、事務所建築と同様に力を注いでいた住宅、工場などもリストアップされ作成された。

「建築作品集」が刊行された後も、彩色図の作成は継続された。おそらく、設計が完了して竣工までの期間に、設計図面作成の最後のなすべき過程として彩色図が作成されたと思われるが、関東大震災以降は行われなかった。

彩色図を作成した経緯を示す記録類はなく、その目的は明らかではないが、目的の一つとして前述のように大正 4 年に刊行予定の建築作品集の編集作業の一環として描かれたことが挙げられる。今一つは、顧客に技術部の多様な建物の実績を示すと同時に、完成予想図として提示するなど、営業ツールとして用いた可能性もある。描かれた作品は多岐にわたり、それらはビルディングタイプに分類され各冊を構成している。定形の用紙に平面図、立面図、断面図などが建物の姿をイメージしやすい工夫をしたレイアウトで描かれており、顧客へのプレゼンテーションを意識したように見える。「建築作品集」の緒言にも「顧客各位の眷顧に應へ」とある。また、「建築作品集」の緒言で「將來教導を蒙るの資となさん」とあり、会社の記録として作製すると同時に、設計部員の訓練と教育を兼ね、設計製図の最終段階として彩色図の作製が課せられたとも考えられる。営業にも係る製図の表現技術の向上に研鑽が積まれたことであろう。

ちなみに、大正 10 年頃に刊行された田辺淳吉講述『建築の研究』(日本女子大学校での講義録、全く同じ内容で『住宅の研究』と題されているものもある)では、第一編の総論に続く第二編に「製図と設計」の講述がある。女子学生が住宅の設計あるいは住宅を新築する際の施主としての基礎知識を獲得することを想定しての講義であろうが、冒頭で「製図と設計」について述べていることから、設計には図面を描けることと読めることが不可欠で、設計修行の基本として製図の訓練を重視していたことが窺われる。同様に、技術部の若いスタッフにも図面を描いて学ぶ、すなわち「手」で覚えることを求めたのかもしれない。同編は一 製図法、二 設計、三 仕様書からなり、製図法の［製図と着色並に印影］の項で、「材料の區別を示す爲に圖面に着色を施すことも製圖法の一部である(筆者注：明治 32 年 10 月工學會は建築図面における材料表示の色彩と点線(ハッチング)の種類を選定している)。また圖上の意匠的研究、配色の研究などにも必要の手段であるから修作的には之を試みるのも差支ない、また「展覧會などに出品する展覧用の圖面には必要の処置であるけれども、技術家の工事用圖面は青寫眞を用ゆるのが普通である。(中略)着色や陰影を施した圖面は粧圖(Show drawing) と云ひ主に一般図に稀に詳細圖に試みられるけれども工事用圖面には行はれることはないことを御承知願ひ度い。粧圖は重に一般觀覧者の感覺に訴へるものであるかが、後者は徹頭徹尾説明的の技術的使命を帶ぶるものである。」と述べている。

§３.『清水組技術部設計 建築作品集 銀行之巻』及び『清水組技術部設計 建築作品集 事務所之巻』

大正 4 年 11 月、個人経営の「清水満之助店」は「合資会社清水組」に改組され、これを記念しさらなる顧客獲得のために、同年 12 月『清水組技術部設計 建築作品集 銀行之巻』及び『清水組技術部設計 建築作品集 事務所之巻』が刊行された(表紙の刊行年は大正 4 年 11 月だが扉の「緒言」は 12 月である)。『銀行之巻』には、「彩色設計図集」の銀行之巻 105 件から 54 件、『事務所之巻』には、会社、商店、事務所之巻 82 件、学校、図書館、病院

之巻 24 件、公共会館、娯楽場、旅館、料理店之巻 20 件、都合 165 件から 39 件を厳選して編輯され、各作品の建物概要を目録(目次)に記し、各作品の外観写真、一部は内観写真、図面(平面・立面・断面図、白黒印刷)が収録されている。装幀は、右に 4 穴あけて紐綴とするアルバム仕立で、両表紙はクロス装、背表紙はなく小口全周に金を施す四方金とし表紙に表題、刊行年等を金字、箔押しとする豪華なつくりである。

これら 2 巻は、明治 33 年に製作された『清水方建築家屋撮影』から 15 年ぶりに刊行された待望の「建築作品集」である。表題からわかるように、収録作品のすべてが清水組技術部の設計である。同作品集の緒言には以下のように記され、「弊社は單り工事そのものゝ請負に止らず各種建築の意匠、材料強弱の計算、電燈暖房、室内装飾の考案、門墻壁の如き附屬物の設計等何れも」と、工事のみならず、意匠、構造、設備、家具を含む室内装飾、外構の設計に係るあらゆる要望に幅広く応ずる実績と格別の技術を保有しているとアピールしている。30 年前、将来を不安を感じながら製図場を設置した頃とうって変わって、自負と気概に満ちた緒言である。

緒言

明治三十八年より大正四年七月迄に弊社技術部に於て設計を擔當し弊社に於て工事を完成したる事務所、商店及公共的建築の主なるものなり。

弊社の營業即ち土木建築請負業は去る文化元年家祖の創始以來今日迄百拾餘年繼續從事し來り大小各般の工事に對し請負の業を完うしたること大方各方位既に周知せらるゝの事實なり、而して弊社は單り工事そのものゝ請負に止らず各種建築の意匠、材料強弱の計算、電燈暖房、室内裝飾の考案、門墻壁の如き附屬物の設計等何れも弊社は參拾餘年の經驗と特別なる技能とを以てし聊も顧客各位の信頼に悖らず其任を全うしたること實に弊社の特色とする處にして本帖の如き最近に於ける實例につき大要を收録し各位の座右に呈するに過ぎず、今後追々續編を上梓し一は顧客各位の眷顧に應へ一は將來教導を蒙るの資となさんとす。

弊社は大方各位の深厚なる愛護により本年十一月組織を合資會社に改め益々發展を試むるの機に臨み更に一層の奮勵と誠實と研究とを持って構造の堅牢と作の優秀と工費の經濟とを圖り以て各位の眷顧に報ひんことを期す。

大正四年十二月　　合資會社清水組　謹白

技術部	技師長	工學士	田邊　淳吉
	技師	工學士	田中　　實
	同		藤森松太郎
	同	理學士/工學士	堀越　三郎
	同	工學士	澁澤　虎雄
	同	工學士	西村　好時

この作品集の刊行は清水釘吉あるいは支配人原林之助の意向であろうが、刊行にむけて技師長田辺のもと、編集作業が行われ、技術部が自信をもって江湖に問う作品を選別し、その彩色図を描いたと考えられる。

緒言の謹白は合資會社清水組だが、その末尾に技術部幹部の名を記したことからも、清水組の本格的西洋建築設計の高い技術力を蓄積し、合資会社となった清水組の技術的側面を牽引するのは技術部(設計部)だという自負があらわれている。一方、前稿で述べた『清水方建築 いへの寫眞』、『清水方建築家屋設計』では設計を担当した技師、技師長の氏名が外部の設計者と同等に記されているが、いわゆるノンキャリの店員の設計については「清水店員」と匿名になっている。帝大出身の学識ある貴重な人材としての技師、技師長は、俸給だけでなく一建築家としての対応も破格の待遇であった。しかし、作品集では、表題に示すとおり「技術部設計」であって個人名は記されていない。作品集に収載された作品の多くは、『建築雑誌』、『建築』、『建築画報』、『建築世界』などの刊行物あるいは個人の『作品集』に発表され、そこには個人名も記され、社内外の建築家たちには個々の担当者がわかっており、ベテランから若い技師に至るまで、優秀な設計者は社会に認知されていたはずである。しかし、会社としては個人名を強調することはなかった。『清水組技術部設計 建築作品集 銀行之巻』及び『同 事務所之巻』に収録された作品は以下の通りである。

「銀行之巻」1. 株式會社豊國銀行　2. 株式會社京都商工銀行　3. 株式會社東京銀行　4. 株式會社第一銀行四日市支店　5. 株式會社東海銀行 6. 株式會社豊國銀行新潟支店　7. 株式會社第一銀行下関支店　8. 株式會社四十一銀行東京支店　9. 株式會社新潟県農工銀行　10. 株式會社唐津貯蓄銀行　11. 株式會社左右田銀行東京銀行　12. 株式會社第一銀行横濱支店　13. 株式會社第一銀行大阪支店　14. 合資會社加島銀行福島支店　15. 株式會社佐賀県農工銀行　16. 株式會社唐津銀行　17. 合資會社加島銀行四谷出張所　18. 株式會社第一銀行釜山支店　19. 株式會社大分縣農工銀行　20. 株式會社明治銀行南出張所　21. 株式會社商工貯蓄銀行縄手支店　22. 株式會社八幡銀行　23. 株式會社船城銀行　24. 合資會社左右田銀行長島町支店　26. 株式會社第二銀行横須賀支店　27. 株式會社東京貯蓄銀行白山支店　28. 大和田銀行大阪支店　29. 株式會社東京貯蓄銀行両国支店　30. 株式會社興業貯蓄銀行深川支店　31. 株式會社東海銀行堀江町支店　32. 合資会社紅葉屋銀行　33. 株式會社第一銀行深川支店　34. 株式會社川崎銀行石岡支店　35. 株式會社大分銀行別府支店　36. 株式會社防長農工銀行　36. 株式會社帝国貯蓄銀行両国支店　37. 株式會社百十銀行下関支店　38. 株式會社第十九銀行東京支店　39. 株式會社京都商工銀行西陣支店　40. 株式會社六十九銀行長岡本町支店　41. 合資會社左右田銀行大阪支店　42. 株式會社東海銀行牛込支店　43. 合名會社森村銀行　44. 株式會社六十九銀行長野支店　45. 株式會社川崎銀行佐原支店　46. 株式會社百三十銀行行橋支店　47. 株式會社中越銀行石動支店　48. 株式會社東京貯蓄銀行神田支店　49. 株式會社高岡共立銀行

50. 株式會社千葉縣農工銀行　51. 合資會社加島銀行岡山支店　52. 株式會社大分銀行　53. 株式會社興業貯蓄銀行下谷支店

「事務所之巻」1. 大阪瓦斯株式会社　2. 日本女子大学校講堂兼図書室 3. 日本女子大学公教育部校舎　4. 朝倉病院　5. 村松合資会社　6. 新潟商業会議所　7. 大倉書店　8. 大倉洋紙店　9. 佛教青年伝導会々堂　10. 徴兵保険株式会社　11. 米井商店大阪支店　12. 株式会社京都取引所　13. 株式会社京都取引所取引市場　14. 西村商店　15. 杉村倉庫部　16. 東京瓦斯株式會社本所出張所　17. 池松用品店　18. 東京瓦斯株式會社浅草出張所　19. 日清紡績株式會社娯楽場　20. 藤井大丸呉服店　21. 大同生命保険株式会社九州支店　22. 名古屋木材株式会社　23. 熊谷呉服店　24. 大同生命保険株式会社京都支店　25. 大同生命保険株式会社名古屋支店　26. 佐多医院　27. 水原委員　28. 合資会社東京堂書店　29. 大同生命保険株式会社中国支店　30. 東洋生命保険株式会社京城支店　31. 帝国生命保険株式会社京城支店　32. 佐賀図書館　33. 星製薬株式会社　34. 澁澤貸事務所　35. 唐津近松座　36. 六合館　37. 大阪血清病院　38. 中越鉄道株式会社島尾海水浴場　39. 国分商店

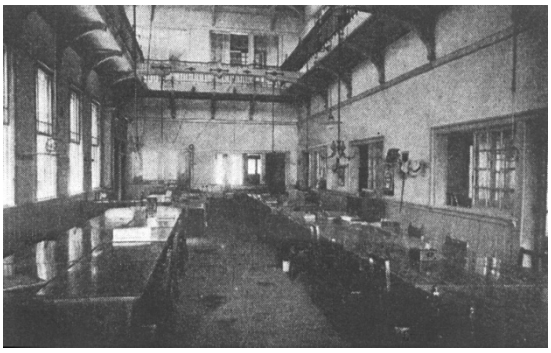
明治後期から大正末期までの間に『建築雑誌』の巻末附図及附図説明欄に掲載された清水組設計施工の作品は、以下の通りである。

報知新聞(明 38/北村耕三)、凱旋門(明 38)、大阪瓦斯(明 38/田辺淳吉)、第一銀行横浜支店(明 44/北村耕三)、第一銀行新大阪町支店(明 44/田中実)、仏教青年伝導会(明 44/清水満之助店)、第一銀行京城支店(大 1/田辺淳吉)、森村銀行新(大 3/清水組本店技術部)、国分商店(大 4/清水組技術部, 田中実)、大分銀行本店(大 4/田中実)、高岡共立銀行本店(大 3/田辺淳吉)、誠之堂(大 5/田辺淳吉)、森井邸(大 5/田中実)、共保生命保険(大 5/渋沢虎雄)、富山県農工銀行(大 5/西村好時)、鍵三銀行(大 6/田中実)、六十九銀行(大 5/田中実)、東京会館(計画中/清水組技術部)岩井商店横浜支店(大 8/清水組設計部, 小笹徳三)、第一銀行熊本支店(大 8/清水組設計部, 西村好時)、藤山工業図書館(大 8/清水組設計部, 田中実)、池田侯爵邸(大 8/田辺淳吉)、百五銀行名古屋支店(大 9/清水組設計部)、百五銀行松阪支店(大 8/清水組設計部)、日本倶楽部(大 10/清水組設計部, 田辺淳吉)、白木屋呉服店大阪支店(大 10/清水組設計部)、大川田中事務所(大 11/清水組設計部)、東京会館(大 11/清水組設計部, 田辺淳吉, 草間市太郎)、丸ノ内ホテル(大 13/清水組設計部)、大橋図書館(大 15/清水組設計部, 海野浩太郎)、森村銀行本店(大 15/清水組設計部, 田中実)、時報欄：織田商店(大 6/清水組)、国分商店倉庫(大 7/清水組)

§４．明治後期の清水組技術部

創業百年を迎えた明治 36 年、社屋は新石町の土蔵造の店から、南鞘町(現在の京橋)に新築移転した。移転直前の製図場は、岡本鑒太郎以下、店童を含めて 8 名程度であったが、この年、帝大工科大学出身の清水清三郎、北村耕造、田辺淳吉が入店する。岡本鑒太郎の入店から 12 年ぶりの採用である。工学士の技師が一気に 3 名増え、新築の製図場は、新たな活気と緊張に満ちていた。

新社屋の設計は岡本鑒太郎、徳政金吾、山田耕作、工事監督は志儀長堯、山田耕作による。木造 2 階建、間口が狭く奥に長く延び、さらに奥に 4 階建の附属家があった。明治 35 年に入店した山田は、鞘町社屋は営業室中央部が吹抜きになっていて二階に回廊を設けた銀行風の建築様式を採っていた(**図－７**)、本石町の店から見たら比較にならぬほど近代的な洋風建築で初めて机の上にそれぞれ電話器が取り付けられていた、とにかく和風から洋式に一変したわけですから驚嘆は一入、石炭焚きの各室温風煖房の建物はそんなにざらにある筈もない、やはり当時の最新式であったと回想している(『清水建設社内報』1960 年 7 月)。また、大正 2 年に入店した小笹徳三は、その頃の幹部と言われるかたがたは今と違って気分的にも非常にこわかった、これは仕事の上だけじゃない、製図場のそばに清水の支配階級のいわゆる幹部食堂があって、当時「営業監督」だった清水釘吉、会計監督の清水一雄、清水揚之助という方達、それに田辺淳吉、田中実、小島弥三久、内山熊八郎とかその頃の最高幹部がそこで食事される、そして食事が済んだ頃、岡本さんが食事が済むと必ず葉巻をくゆらせ、その薫りが製図場へ流れてくる、すると、製図場の私どもみんなが「さあ、巡視がはじまるぞ」というわけで姿勢を正して製図板へかじりついたと当時の製図場の様子を回想している(小笹徳三『十九象夜話 わたしの 3/4 世紀』)。

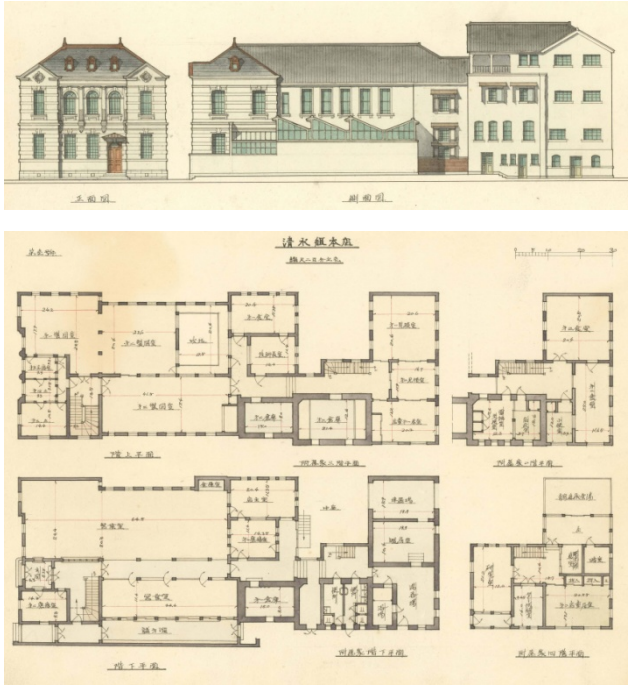


図－７　鞘町本店営業室

正面玄関を入り、玄関ホールの右手に第二応接室と 2 階への階段室、左手には奥まで延びる広く、天井の高い営業室(1)を配し、玄関ホールから中廊下に進み、右手に営業室(2)、左手に正面から延びる営業室(1)がある。正面玄関向かって右脇の出入口から、職方の控室へ至り、これは営業室(2)に接する。広い営業室(1)の奥の部分は採光のため吹抜とし、その奥に第一応接室と店主室を配している。右手の営業室(2)の奥には、第一倉庫を設ける。さらに奥の中庭を挟んで建つ 4 階建の附属家との連結部分に便所を配し、附属家の 1 階には浴場、湯呑場、暖房室、背後の道路から出入りする車置場を設ける。

玄関ホールから階段を上り、2 階には正面側に第三・第四・第五応接室を配し、階下の広い営業室(1)の直上部分

に第一・第二製図室を配し、右手の営業室と職方控室の上階を第三営業室とする。第二製図室の奥は吹抜で、銀行の様に廻廊をめぐらし、その奥に第一食堂、技師長室を設ける。1階第一倉庫直上は第二倉庫とする。一番奥の4階建附属家と中庭の左手の連結部分は、正面側ほど天井が高くなく、正面側の2階から4段上って附属家の3階に通ずる。連結部分の1階便所の2階には電話交換室と宿直室、附属家の2階には小使室と第二・第三食堂を配し、正面側の製図室に通ずる連結部分と附属家の3階には、第三倉庫、第一・第二見積室、第一店童居室を配し、4階には、研究室、セメント試験室、電光写真室、暗室、青写真作業場、同(屋上ベランダ)、第二店童居室を設けている。この図面(**図－8**)が描かれたのは大正2年頃で、室名などが竣工時と異なる可能性もあるが、製図室の規模や配置は当初と変わらないと思われる。



図－8　鞘町清水組本店　彩色図

明治36年は、店員(属員)80名、管理職20名のうち、製図場(設計部)には、技師長岡本鋈太郎、技師の清水清三郎、北村耕造、田辺淳吉のほかに、町田市太郎、藤森松太郎、山田耕作、徳政金吾らがいた。技師長と技師は幹部職員として破格の待遇であった。すなわち、営業室の規模とさして変わらない広さの製図室を設けていることに合点がゆくとともに、設計すなわち専門の技術陣の重要性と必要性を認識していたことがわかる。なお、彼等の下には、製図工、店童がいたはずである。

セメント試験室の存在も注目される。田辺の長男普氏は「父は清水組の設計部に勤めておりました。ときには私を設計部に連れて行ってくれました。そのとき、コンクリート製のブロックがいくつも水の中に浸してあるのを見かけて、これは何をしているのかと問いました。それはコンクリートの成分比を変えて水に対する強弱を試験しているのだと教えてくれました。」と回想しており(博物館明治村『明治建築をつくった人々 その二』1986)、当時の技師は意匠設計だけでなく、構造、設備の設計に加え、欧米の新技術の導入と開発にも取り組んでいた。前述の小笹は、大正2年頃の記憶に残る工事として深川の渋沢倉庫について、鉄筋コンクリートの初めで、今は鉄筋の配置図面なんか一本線で引いているが、当時は八分筋は太いから二本の線で引く、しかもジョイント部分は針金でどういうふうに巻くかまで書いて渡すといった具合、コンクリートの強度試験も今(筆者注：昭和40年)と同じようにもうやっていた、ブリケットを拵えて計算材料にしていた記憶があると述べている。意匠は勿論のこと、構造のみならず、設備設計についても最新の技術の導入に努めていた。

図－9　清水組製図場　大正4年頃

明治39年末から40年初頭の田辺技師の日常勤務の様子を『木葉會會誌第三號』(明治42年2月)の會員消息欄に、田辺が寄せた短文から窺うことができる。「朝例刻製圖場に入る岡本田中の二會員と一供に仕事するのであるから心嬉しい製圖の種類は随分雑たである。之は商賣柄是非もない(後略)」製図場では、技師長岡本鋈太郎、入店したばかりの田中実技師も一緒に製図をしていたこと、さまざまな種類の設計をおこなっていたことがわかる。

製図場では受注した案件の設計の他に、展覧会等に出品する図面の作製も積極的に行われていた。明治44年の東京勧業展覧会には、清水店から7件10枚の作品を出品している。そのうち、第三等二席となった岡田信一郎と田辺淳吉の共作の「紳士住宅圖案」は、実は富本憲吉が描いたと彼自身が回想している(富本憲吉『私の履歴書』)。明治43年、英国留学から帰国した富本は、大沢三之助の指示、岡田信一郎の口添えで翌年1月から半年ほど清水店に勤めた。同年2月、富本は美校の友人で画家の南薫造に、朝9時から夕方5時まで製図板に向かって立ち続けでたまらないと手紙を書いている。

岡田信一郎については「東京美術学校交友会会報」(昭和16年)の岡田信一郎の訃報記事の略歴に「卒業後直ちに警視廳並に清水組の囑託となり明治四十一年より四十

四年まで日本銀行建築事務を囑託せらる 大正四年日本赤十字社建築顧問に擧げらる」とある。また『東京勸業展覽會建築圖案集』(明治44年)によれば、製作者は田辺と岡田の連名であるが、出品者は清水滿之助と記され、清水店の岡田として応募したことになっており、少なくとも44年頃までは清水店の嘱託であった。

製図場には富本の他にもアルバイトが来ていたと思われる。田辺、岡田、北村、田中実といった帝大出身の技師や、東京高等工業学校、美術学校出身の技手が中心となり、工手学校の夜学に通う若い係員を指導しながら、出展図面を描き上げたと思われる。締切間近の製図場は熱気に溢れていたに違いない。そして、建築談義、芸術談義が活発に行われていたことは想像に難くない。

§５．大正期の清水組設計部

大正２年７月、岡本鑒太郎に代わり田辺淳吉が五代技師長となった。大正３年頃には、清水店員の総数は300名余となり、技術部も50名近くに増えている。

田辺が技師長となって２年後の大正４年、清水満之助店の個人経営から合資会社清水組に改組され、翌年、職制も改められた。田辺に技師長を引き継いだ岡本は監事として在籍していたが、同年７月退社した。退社に際して撮影された製図場での記念写真には、39名の部員が写っている(図－10)。

図－10　清水店技術部スタッフ　大正４年頃
前２列目右から３人目：田辺、その左に岡本鑒太郎、北村耕造
前３列目左から４人目：清水巖、前列右から４人目：大友弘

初めて技師長が招聘された明治20年代初頭は、後見人の下に支配人と技師長があり、支配人の下に横浜本店と東京支店が置かれたが、明治28年には支配人の下に技師長、東京本店、横浜支店、技師長の下に技師が置かれた。同29年には、支配人の下に本店と支店が置かれ、本店の中に技師長、技師、技手が置かれていた。

大正４年に合資会社清水組に改組し、同社店長(社長と称するのは、昭和12年に株式会社になってからである)となった清水釘吉は、翌５年に組織改正を行う。

本店の下に設計部と工事部が置かれ、設計部には、技師長、技師、技師補、工事部には、工事長、工事主任、現場主任、係員が置かれた。この体制は、設計部部長の下に次長、技師、技師補、係員を置く昭和２年まで続いた。『戦前社史資料』には、設計部と記されているが、従来のまま製図場、技術部と称することが多かった。

図－11　清水組製図場　大正４年頃
左手前２人目：田辺淳吉 ほか、田中實、藤森松太郎
渋沢虎雄、西村好時、小笹徳蔵、清水巖、松田軍平

図－12　技術部研究室　大正４年頃　左から２人目：田中実

設計部の陣容の拡充は、すなわち設計部の技術力の向上の結果である。初期の鉄筋コンクリート造、渋沢倉庫(明治42、岡本鑒太郎、田辺淳吉)、初期の鉄骨造、丸善(明治43、佐野利器)を嚆矢として、新しい構造技術とそれにともなう施工技術が急速に普及するなか、近代的な設備技術への取り組みにも力が注がれた。森村銀行(大正３年、田中実)新築計画では先進技術を多く取り入れ、施工をも考慮した設備設計を行い現在の設備設計図とほとんど変わらない図面を作成し、以後の清水組における銀行建築の標準モデルとなった(清水建設二百年史)。このように設計部の取り組みは常に先進性を目指していた。大正元年、大阪市中央公会堂の指名コンペで田辺淳吉案は佳作となるが、講評では、特に設備計画が他より優っているという指摘が見られる。田辺の指名ではあるが、製図場挙げて図面を作成し応募したことは想像に難くない。ちなみに請負に所属する者の指名は田辺のみである。請負の設計部が一般の設計事務所に優るとも劣らないことを示している。こうした設計部の盛り上がりと部員の意識

が高まるなか、設計部の独立問題が持ち上がる。

大正 5 年に工事長制度が発足し、案件の工事入手から完成引渡まで一貫して権限を有する工事長の力が強まり、設計部との間に軋轢が生じはじめた。明治中期に「製図場」を設置した当初の目的と現実の会社運営、現場運営との間にズレが出てきたのである。

大正 3 年、中條精一郎らを中心にわが国最初の建築家の団体となる日本建築士会が設立され、同 6 年に同会の規約第 6 条で「建築士は建築請負業を営む事を得ず又請負業者の使用人たるを得ず」と会員を専業設計者に規定し、同 8 年には最初の建築士法案を脱稿した。これを受けて大正 10 年前後、清水組では上述の内部事情もあり、設計部の独立が模索された。店長釘吉は「設計事務所というものは、曾禰中條、横河、辰野葛西事務所に始まるが、清水組は明治の初期以來設計しつゝ仕事をして來たので、學者を聘したのもそのためであった。坂本復経、渡邊譲、岡本鑒太郎、田邊淳吉、田中實等歴代の技師長は皆そのために招聘したものであって、明治以來そういう風にやって来た、此様にして請負人として設計をするという模範を示してゐるのだから、今更ずっと新しく出來た設計事務所なり、その他の方面から兎や角言はれて來ても、一般の請負業者は如何様であるとしても、清水組に限っては承知出來ない」と否定的であった(『清水釘吉翁』)。しかし内外に独立すべしの意見が強くなり、釘吉は独立案の作成を許し、田中実のもと小笹徳三は独立を仔細に検討し長文の報告書を作成した。釘吉の心算は、独立した設計部は清水家から全く外すのではなく、営業は営業、事務所は事務所と別れ、あくまでも清水家の設計事務所とするものであった。釘吉は帝大造家学科で学び技師、技師長として設計実務も経験し、設計に対する理解をもっており、設計部技師と現場主任が議論になると決まって設計部の意見を立てたと伝えられ、いわゆる経営者とは異なる釘吉であったが、明治以来の設計施工を堅持することは譲らなかったのである。独立を主張した設計部内部からその気運は衰え、後述のように第 6 条規定に対する諸家の反対が多く、規定を含む建築士法案は成立しなかったので、独立問題は自然消滅した。

法案第 6 条の、建築士は土木建築の請負業を営むことを得ずの規定は、設計の力をつけてきた建設業界は勿論、佐野利器、内田祥三を中心とする建築学会、設立間もない日本建築協会ほか土木や周辺分野の多くの強い反対があった。大正 14 年、最初の議院提出間際に建築士会は全国の建築関係者に意見を募り、佐野は「建築士法案は問題にならぬ―不必要にして弊害あり」、清水組の小笹は第 6 条は削除するのが妥当と回答している。結局、建議案第 21 条に「建築士にアラザル者ガ建築ノ設計竝ニ監督ニ従事スルコトヲ禁ズルモノニアラズ」の一文が追加された。昭和に入りこの議論はますます激しくなった。昭和4年、佐野は帝大を辞任し清水組副社長に就任するが、この問題と無関係ではなかろう(速水清孝『建築家と建築士』)。建築士法案は昭和 15 年までに 12 度も議会に提出されたが時期尚早として見送られ、紆余曲折を経て戦後昭和 25 年に成立する。この規定を含む法案が成立していたら、請負業の設計部は独立を余儀なくされ、その後の日本の建築界は大きく変わっていたに違いない。

昭和 6 年の「店員配置表」を見ると、設計部に置かれた技師長の下に技師を 2 名ずつ配して工事主任とし、その下に現場主任、さらに係員を配したグループを構成して、上席の技師の専門に応じて、附帯設備係、家具装飾設備係、現寸係として役割分担させている。このことは、当時の設計図の図面名称欄の印座に主任印の欄があることと合致する。当時はおそらく、各グループの上に立つ上席技師の名前を付して、例えば、桜井博の場合は桜井グループあるいは桜井係と称していたものと思われる。ただし、構造計算係は、意匠も担当する技師のグループのなかの一チームとして扱われているようである。すなわち、意匠と構造係はリーダーとなる技師のもとに併置され、一つの案件について同じグループで意匠と構造を設計したと思われる。これに対し、附帯設備係や家具装飾係は、独立して、他の意匠・構造を担当するグループの一部を受け持っていたと思われるが、会社組織のなかに明確に位置づけられていたわけではない。

昭和 10 年の組織改正で、技師長は設計部内でなく本店直轄とし、設計部には、部長、技師、技師補、係員を配し、家具装飾係、附帯設備係、現寸係を設置して、それぞれ係長を置くことが明確になる。しかし、前述のように、これより以前、すでに大正期には、設計部内の運用で係員の配置を、家具装飾係、附帯設備係、現寸係に分化する兆しがみられ、昭和初期には構造係も特化されている。このことは、『彩色設計図集』からも窺える。「室内並家具電燈之巻」(1909〜1913)に収録された室内装飾図、家具、電燈の図面を見れば、すでに明治末期に建築設計とは別に「家具装飾係」の存在があったことは一目瞭然である。明治末期から東京美術学校や京都高等工芸学校の図案科出身者が入店している。

大正 3 年から 9 年までに入店し清水店技術部(設計部)に入った者として以下の氏名が確認される。2 名の女性が含まれるが、専門の技術学校を卒業し、製図工(図面を烏口でトレースする)として勤務していた。大正末期には女性部員はさらに増える。清水組における女性技術者の嚆矢といってよい。大正 9 年に文部省の肝入りで生活改善同盟会が設置され、家政学を専門とする女性委員も参画している。関連して設置された住宅改善委員会には、技師長を退任した田辺淳吉が副委員長となっている。この頃 、田辺は日本女子大學校の家政科の教授となり住宅建築の講義を行っていた。こうした時代背景もあって建

築に係わる女性が現れるようになったと思われる。

※ 清水建設所蔵「店員台帳」「設計部員名簿」による。大正 2 年入店：椎名昇/工手　大正 3 年：西村好時/帝大　須藤貫一/工手　鈴木栄太郎/工手　間島沖/帝大　斉藤傳　八尋丹三/早大　大正 4 年：森谷延雄/東高工図案　渡辺能一/東京工　宇佐美善太郎/東高工附　小松五郎/工手　大正 5 年：矢田部奎哉/日本工科　村松清太郎/早工　船越四郎/早工　島崎豊壽/東京工科 音澤治信/工手　横山巌/中央工　大正 6 年：小黒松次郎/東京工科 松江仲吉/高工　橋本富雄/東京商工　真下四郎/工手　海野浩太郎/帝大　吉田栄次郎/東高工　小森武　岡本光博/工手　安藤喜八郎/東美図案　大正 7 年：武間主一/京高工図案　岡村頴三/東京工科　江元久雄/中央工　松田軍平/福岡工,名高工　北村芳雄　鶴田貞吉　西川原誠一/福岡工　足立功　広江文彦/京高工図案　塩見邦夫/熊本工　天池弥三郎/東高工　武田辰雄/東京工科　田中光子/高小　八木憲一/帝大　中村竹三/早理工高　大正 8 年：加藤傳三　中山源治/東高工　櫻井博/名高工　深尾研吾/早大　鶴崎スガ　大正 9 年：梅澤省三/早工　大井嘉一　花房次夫　重松守善/東高工　江木佐/名高工　児玉庸三/京工芸高　相原信/東高工、コーネル 穐西猶一/和歌山工　山下能一/名高工　廣澤紀行/徳島工　田口武臣　大澤義雄/東高工　興梠亀一郎　菅原安之助　野末忠吉　畑中勝　田辺好幸　山田健治　森岡雄次　入店年不明：高山憲三/東高工

帝大：帝国大学工科大学　東高工：東京高等工業学校　名高工：名古屋高等工業学校　京高工：京都高等工芸学校　東美：東京美術学校　工手：工手学校　早工：早稲田工手学校

下図は田辺が技師長を辞す大正 9 年頃の製図場での記念撮影と思われるが、部員は約 79 名に増えている。

図―13　大正 9 年頃　設計部記念撮影　前 3 列目右端：森谷延雄、前 3 列目右から 5 人目：田辺淳吉、その左：田中実

§6．おわりに

本稿では、『彩色設計図集』、『合資会社清水組技術部設計 建築作品集』の解題を示し、これらが明治後期から大正までの清水組設計組織の拡充の過程を如実に示していることを確認した。いいかえれば、前稿で述べた明治中期にはじまる設計組織「製図場」が大正になって技術部となり設計部となる 30 年余りの軌跡のあかしとして、『清水方建築 いへの寫眞』、『清水方建築家屋撮影』、『彩色設計図集』、『合資会社清水組技術部設計 建築作品集』を位置づけることができる。

最後に、前稿と本稿で述べた清水組建築作品集のその後について述べる。『彩色設計図集』と『清水組技術部設計建築作品集』との関連はすでに述べた。この時、顧客の個人情報の観点から「住宅之巻」は刊行されなかった。

彩色図作成の目的の一つであった『建築作品集』が大正 4 年に刊行された後も彩色図の作成は継続されたが大正 12 年 9 月の関東大震災以降は作成されなかった。

その後、震災復旧が一段落した昭和 10 年に『住宅建築圖集』第一輯、11 年に『ホテル建築圖集』、14 年に『住宅建築圖集』第二輯が刊行された。これらの刊行は『清水組技術部設計 建築作品集』が合資会社清水組となったのを期したのと同様に、昭和 12 年に株式会社清水組となったことと無関係ではない。

『住宅建築圖集』第一輯には、明治 39 年から昭和 9 年までの住宅作品 200 件（明治 21 年の兜町渋沢邸を除く）、第二輯には昭和 9 年から 13 年までの作品 165 件が収録されている。大正 4 年の『清水組技術部設計建築作品集』（銀行之巻、事務所之巻）と異なり、清水組の設計施工に限定せず、外部の建築家、設計事務所の設計による作品も収録している。したがって、図版の版下には「彩色図」は使われず、設計図面をリライトした略平面を用いている。個人情報に留意して、邸宅名はイニシャルで表記し所在地は明記しない。第一輯の巻頭には大震災で焼失した渋沢邸を載せ、『清水方建築 いへの寫眞』に掲載した同邸の写真の複製（同書の凡例に「震災に依り記録の一部を焼失した」とある。写真原本が焼失したのであろう）を貼り「日本橋區兜町貳番地邸　故子爵澁澤榮一閣下舊邸」のキャプションを付している。昭和 6 年に逝去した渋沢への追慕と同時に、同書が明治の最初の作品集『いへの寫眞』の系譜に連なることを示しているといえよう。

『ホテル建築圖集』は、大正 4 年から昭和 10 年までのホテル 15 件（築地ホテル館を除く）、旅館建築 16 件が収録されている。巻頭には、築地ホテル館の錦絵（原色）3 種と古写真 2 種が掲載されており、同書の序で清水釘吉は「之迄弊社に於て施工致しました諸種の建築の中でホテル建築は最も早くから力を盡した」と述べている。二代喜助の築地ホテル館に対する敬愛の念とともに清水組のホテル建築に対する特別の思いが『ホテル建築圖集』を刊行させたといえよう。

昭和 10 年からは毎年『工事年鑑』を刊行し、前年に施工した清水組の実績作品集として公表しているが、戦雲垂れ込む昭和 17 年以降は刊行されなかった。

※ 本稿は『清水建設研究報告』第 89 号（平成 24 年 1 月刊行）所収の稿に一部修正を加えたものである。